特260
907

菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其二十九）

始

特
907

菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其二十九）

特 260
907

臨濟宗
建長寺派管長
菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其二十九）

碧巖錄講演 其二十九 目次

第八十五則　桐峰庵主作虎聲……一頁
第八十六則　雲門厨庫三門……二一頁
第八十七則　雲門藥病相治……三五頁
第八十八則　玄沙三種病人……五二頁

碧巖錄提講

第八十五則　桐峰庵主作虎聲

◎垂示

垂示云、把定世界、不漏纖毫、盡大地人、亡鋒結舌、是衲僧正令、』項門放光照破四天下、是衲僧金剛眼睛、』點鐵成金、點金成鐵、忽擒忽縱、是衲僧拄杖子、』坐斷天下人舌頭、直得無出氣處、倒退三千里、是衲僧氣宇、』且道、總不恁麼時、畢竟是箇什麼人、試擧看、』

讀方

垂示に云く、世界を把定して、纖毫を漏らさず、盡大地の人、鋒を亡じ舌を結ぶ、是れ衲僧の正令なり。』頂門に光を放ちて四天下を照破す、是れ衲僧の金剛眼睛なり。』鐵を點じて金と成し、金を點じて鐵と成し、忽ち擒へ忽ち縱つ、是れ衲僧の拄杖子なり。』天下の人の舌頭を坐斷して、直に氣を出す處無く、倒退三千里ならしむることを得る、是れ衲僧の氣宇なり。』且く道へ、總に不恁麽なる時、畢竟是れ箇の什麽人ぞや。試みに擧す看よ。』

字解、分解。

把定、』禪家の通常語。把住と同意。掌握すること。――

亡鋒結舌、』自己のことでなし、他人をして如何ともなし得ざらしむる義。――正令、』向上の一路から、所謂法令親なしの正令である。――四天下、』佛教學の須彌山說。今日の學說には違背するかも知れぬ。されど試みに初學者の爲に婆言しておきませう。

須彌山と云ふ山を宇宙の中心として、その四方に四大洲がある。圖に示せば左の如し。

須彌山

東方は弗婆提洲、守護神は持國天王
西方は瞿耶尼洲、守護神は廣目天王
南方は閻浮提洲、守護神は增長天王
北方は鬱單越洲、守護神は多聞天王

金剛眼睛、』正法眼のこと。今日の活眼又は靈眼。――點鐵成金、』古語に、還丹の一粒、鐵を轉じて金となし、至理の一言、凡を轉じて聖となす、とある。不思議の働きを景樣したもの。蓋し衲僧の平生底。』――拄杖子、』玆では敏腕の活用に托して斯く云ふ。』――總不恁麽時、』是は以上列擧した四箇條、それが出來ぬ時。』

提講。

此の垂示は衲僧家の本領を徹底的に陳述したのである。苟も衲僧たる者は此の垂示の如くならざるべからず。然らざれば其の名は衲僧でも其の實は衲僧にあらず。愚僧、凡僧、駄僧、啞羊僧である。』衲が如きは愚僧中の愚僧、凡僧中の凡僧。駄僧にあらざれば啞羊僧である。故に今此の垂示を拜讀して慚汗背にしたゝるを如何せん。諸君、奮つて衲僧の本領を發揮せられよ。』

圜悟禪師曰く、一指を動かさずして全世界を自己の掌裡に收め、而して宇宙の人間をして貧乏動きも出來ぬ樣にする、是が

衲僧の正令である。――――如何に混合、如何に亂雜、如何に重複してをつても、自己の心眼を以て一見辨見、寸毫の過失なき樣に照破する、是が衲僧の金剛眼睛である。――――加之、震天動地の大神通を以て、鐵を轉じて金となし凡を轉じて聖となし、又は日月をして光を失はしめ、又は瓦礫をして輝きを生ぜしむ、是が衲僧の拄杖子である。――――若し夫れ、衲僧の氣宇如何、と云はば左の如し。

假令、全宇宙の人、一時に押し寄せ來ると雖も、彼をして一言半句も吐露せしめず、悉く猫子に紙袋を被せしそれの如く、彼等をして三千里外に退却せしむ。――――

以上は衲僧家の衲僧家たる所以の一部を云うたもの。是が眞箇事實に躬行が出來れば、まあ〳〵それでよし。然るに衲僧家の本領の一部すら實行が出來ぬとしたら、その人は如何なる人。無論、愚僧、凡僧、駄僧、啞羊僧である。本則に其の人あり。行きて見るべし。

◎本則

擧、僧到『桐峰庵主處』便問、這裏忽逢『大蟲』時又作麼生、庵主便作『虎聲』、僧便作『怕勢』、庵主呵〻大笑、』僧云、這老賊、庵主云、爭奈『老僧』何、僧休去、』雪竇云、是則是、兩箇惡賊、只解『掩』耳偷『鈴』、

擧す。僧、桐峰庵主の處に到つて便ち問ふ、「這裏忽ち大蟲に會ふ時又作麽生。」庵主便ち虎聲を作す。僧便ち怕るゝ勢を爲す。庵主呵々大笑せり。僧云く、「這の老賊。」庵主云く、「爭でか老僧を奈何せん。」僧休し去る。雪竇云く、「是なることは即ち是、兩箇の惡賊、只耳を掩うて鈴を偸むことを解するのみ。」

字解、分解。

桐峰庵主、」此の人は臨濟禪師の弟子、四庵主の一人。」四庵主は、虎溪、覆盆、杉洋、桐峰。――或人は云ふ、「桐峰庵主は社會に出て活動するほどの手腕に乏しく、隨つて名聞利養に奔走しなかつた。故に一生涯、枯淡の生活に滿足して居られた。」と。――問僧、」作家の漢なり、と云ふ說もある。又は普通の凡僧、と云ふ說もある。それは、其の人其の人の見樣にある。――大蟲、」虎のこと。――掩耳偸鈴、」其の馬鹿さを云ふ。頭かくして尻かくさず、と云ふ意に同じ。

提講。

或人は、「桐峰庵主を訪問した此の僧は無名ではあるが、よほど自信のある人らしい。」と云ひ、――又或人は、「無眼子の凡僧で、所謂盲目蛇、物を懼れずである。」と云ふ。何れが是、何

れが不是、は暫く見る人の意見に任せ、衲は衲の立場から例の管見を婆言することに致します。

一日、一人の禪僧が桐峰庵主の處に來り、寒暖の禮を閑却して、いきなり口を開いて云く、「庵主殿、忽ち此の處へ大蟲(虎)が飛び込んで來たらどうなさる。」問僧、自ら大蟲氣取、闇に爪牙を鳴らし、將に庵主に飛びかゝらんとする勢。――庵主、其の問を聞くや、間に髮を入れず、全身に力を入れ、虎の唸り聲をウワーと發した。普通の僧であれば、驚いて事實に腰をぬかす處。然るに此の僧、待つて居りました、と云はぬばかりに調子を合せ、如何にも肝を潰したかの如く怕るゝ勢をなして見せた。(禪機を多少手に入れて居たものと見える。)

桐峰庵主は、問僧の驚いた滑稽さを嘲弄したのか、或は機敏のありさまを稱讃したのか、その底意は三者の知る處でないが、兎に角、何と思はれたか、呵々大笑一番された。問僧、庵主の呵々大笑を如何なる意味に受取つたか、這老賊、と毒づいた。聊か爪牙ある虎の如くである。が、元來が僞物である。庵主云く、「如何に君が毒舌を揮うても此の老僧を一寸も動かすことは出來まい。」圜悟禪師は、可惜放過、嗚呼 殘念々々、取り逃がした、一掌を與へたら、と下言して居る。或は然らん。問僧に眞箇の力があつたなら、休し去るでなく、何とか活手段があつ

たであらうに。取り逃がしたには如何にも殘念々々。取り逃がした點は主客何れも五分々々。――

垂示に、總に不恁麽の時、とは蓋し之是等の場合を豫言したものならん。――雪竇禪師、恁麽の問答商量を見て覺えず口を出し、是は則ち是と許して、すぐに兩箇惡賊と奪うた。流石は雪竇禪師だ。敢へて雪竇でなくとも、傍觀の者も眼ありで、岡目八もく、衲でもそれ位のことは云へる。雪竇禪師、主客に軍扇を揚げて、只耳を掩うて鈴を偸むことを解す、とケリをつけられた。――曰く、勝敗なし。――其の意は、主客ともに互に作戰の計略は分つて居る、それを分らぬ顏をして問答商量をなした、それを指して掩耳偸鈴、と云うたもの。――今日お互も敢へて禪に限らず、總ての方面に於て耳を掩うて鈴を偸んでをる。――こゝに話をして居る衲も、そこに聽講して居られる諸君も、其の連中其の連中。

◎頌

見之不取、思之千里、好箇斑々、爪牙未備、君不見、大雄山下忽相逢、落々聲光皆振地、大丈夫見也無、收虎尾兮捋虎鬚、

讀方

之を見て取らざれば、之を思ふとき千里ならん。好箇の斑々

も、爪牙未だ備はらず。』君見ずや、大雄山下忽ち相逢うて、落々たる聲光皆地を振ひしを。』大丈夫見しや也た無しや。虎尾を收めて虎鬚を捋でよ。」

字解、分解。

見之不取思之千里、』逢うた時は笠をとれ、と云ふ俚言がある。それと同意。千歳の一遇を失すれば千歳たゝねば遇ふことは出來ぬ。言ひ換へれば時を失ふなと云ふこと。――千里は、本則に虎が出て居るから、それを連想して雪竇禪師が斯く云はれたもの。――斑々、』虎の皮の文彩を云ふ。――意は、問僧の外面のみ美にして內裏の活力なきことを評す。――君不見云々、』百丈と黃檗との問答に意を取りたるものなり。百丈禪師が山門頭で何かして居らるゝと、弟子の黃檗が外から歸つて來た。百丈曰く、「何處に行つて居たか。」黃檗云く、「菌を採りに行つて居りました。」百丈、「大きな虎が居たであらうが。」すると黃檗が大きな虎の唸り聲をウワーとやつた。百丈は腰にして居た斧を執つて、斬り殺す姿勢を示すと、黃檗、イキナリ師匠の百丈をヒツつかんで ビシヤツと一擊を與へた。』其の晩の上堂式に百丈禪師、座下の大衆に向つて、「大雄山下有一虎、汝等諸人出入切須好看、老僧今日親遭一口。」と暗に黃檗を稱揚なされた歴史がある。雪竇禪師は、本則の一無名の僧と桐峰

庵主との對抗底を百丈黄檗のそれに比し、「諸君、既に見て居るであらう。あの大雄山下の商量は實に落々聲光云々だと吟じ、――轉じて座下の諸禪者に、大丈夫と呼びかけ、見也無、と云うて潙仰父子の問答を以て此の頌を結ばれた。潙仰父子の問答は左の如し。

或時、潙山靈祐禪師が弟子の仰山慧寂禪師に向つて曰く、「黄檗の虎の話をどう思ふ。」すると仰山は、「お師匠樣のお考は。」そこで潙山、「あの時に百丈は黄檗の虎を一斧で斬つて知らぬ顔をしてをればよいのに。上堂などをして、大雄山下に一虎あり老僧親しく一口に遭ふ、なぞと親馬鹿を丸出しになされたざまは見られた圖でない。」と。是を聞いて仰山、潙山の批評に反對し、「百丈は黄檗を褒めたのみならず、是を活かし是を働かせたのである。あれでこそ、虎頭に騎つて虎尾を收めた、と云ふべし。あれでなければ始末がついたとは云はれません。」と思ふ通り述べますと、潙山は仰山がスツカリ虎を手に入れたことを知つて、「寂子甚だ嶮崖の句あり。」と賞詞を與へられた。――

提講。

何事にも時機と云ふものがある。時機の到來した、其の時を失ふと、二度の時機は容易に到來せぬ。』桐峰庵主と一僧の問答は方に好時機到來である。互に全力を傾け眞箇の活商量をな

すべきに、何のことだ、主客共に虎のまね、云はば、ハリコの虎、聊か活氣がない。折角の時節到來をみすゝ取り逃がした。之を見て取らず、眼前に落ちて居る寶玉を鳶にさらはれたも同樣。後で如何に切齒しても取り還しはつかぬ。之を思ふとき千里、虎に因んで千里と云うたもの。千里どころか十萬八千里だ。——可謂、好箇斑々、爪牙未備、實に桐峰庵王も問僧も、(外面)見た處如何にも虎であるが、(內面)爪もなければ牙もない。爪牙の備はらざる虎では如何に嘯いても微風だも起らぬは理の當然。苟も禪僧が主客相見、問答商量をするならば、雲も起すべし雨も降らすべし。垂示にあるが如く、衲僧の正令を下し、

世界を把定して纖毫も漏らさず、盡大地の人をして鋒を亡じ舌を結ばしむべし。——又頂門の金剛眼より光を放ち四天下を照破すべし。——又拄杖子を拈じ來り、鐵を轉じて金となし金を轉じて鐵となす大神通を運出し、天下の人をしてウンともスンとも云はせず、速かに三千里外に退却せしめる氣宇がなければならぬ。——諸君、見たであらう、百丈禪師と黃檗禪師の虎問答を。あの大雄山下で、互に雲を起し雨を降らし、兩々奮鬪なされた其の樣子は、山岳震動、天地分碎であつた。——諸君、知つてであらう、潙山禪師と仰山禪師の虎商量を。實に見る人、聞く人をして、覺えず寒毛を卓立させる慨がある。

――時機なきが爲に問答が出來ぬなら、それはそれで止むを得ず。幸に時機を得て法戰一場するならば、血も流すべし、肉も裂くべし、骨も碎くべし。それでなければ法味は出ぬ。禪機は顯れぬ。――必ずしも禪の問答、法の商量に限らず。今日平生やりつゝある一切の事柄も、遊び半分や浮氣で、――義理や人前、――ナグサミやモノズキでなしては光もなければ味もない。重みもなければ趣もない。同じくやるならば、事の大小を論ぜず、眞劍に眞劍に、時の好惡を問はず、眞劍に眞劍に。眞劍は萬事成功の元である。

（昭和十五年六月十五日講演）

第八十六則　雲門厨庫三門

◎垂示

垂示云、把定世界、不漏絲毫、截斷衆流、不存涓滴、開口便錯、擬議即差、且道、作麽生是透關底眼、試道看、』

讀方

垂示に云く、世界を把定して絲毫を漏らさざれ。衆流を截斷して、涓滴も存せざれ。口を開けば便ち錯り、擬議すれば即ち差はん。且く道へ、作麽生か是れ透關底の眼なるぞ。試みに道へ看よ。』

字解、分解。

字解も分解も共に必用なし。把定世界より不存涓滴に至る迄の四言四句は八十五則の垂示と大同小異。故に敢へて婆口を弄せず、讀んで字の如くとしておきます。要は、漏らさず存せず、それを命令的に使用することを忘れてはならぬ。

提講。

圜悟禪師、大衆に垂示して曰く、「敢へて禪僧に限つたことではないが、苟も禪僧を以て自任する人は先づ以て透關底の活眼を開かざるべからず。盲目では、如何に思慮をめぐらしても、如何に議論を戰はしても、口を開けば便ち錯、擬議すれば却て

差ふ。思へば思ふほど、論ずれば論ずるほど、そのもの、それに、決して近くはならぬ、寧ろ遠くなる。況んや世界を把定して絲毫を漏らさず衆流を截斷して涓滴も存せず、なぞと云ふ越格の働きは夢にも見ることは出來ぬ。サァその透關底の眼とは抑〻如何。』透關底の眼を知らんと欲せば去つて本則の雲門禪師に參ぜよ。――

◎本則

擧、雲門垂語云、人々盡有光明在、看時不見暗昏々、作麼生是諸人光明、自代云、厨庫三門、又曰、好事不如無、』

舉す。雲門、垂語して云く、「人々盡く光明の在る有り。看る時見えずして暗きこと昏々たり。作麽生か是れ諸人の光明なるぞ。」自ら代つて云く、「厨庫三門。」又云く、「好事も無きに如かず。」

字解、分解。

有光明在』古來から、光明の在るあり、と訓じて居る。井上君の如きは、「それでは漢文法に背く。漢文法から云へば、在光明裏の意であるから、光明に在ることあり、でなければならぬ。」と云うて居らるゝ。或はそれが本當であるかもしれぬが、

納は古來の訓讀に隨つて話を進めます。光明とは畢竟如何なる物ぞ。人々の語默動靜、坐作進退、是れ各自が本具の光明。釋迦にあつても增さず衆生にあつても減ぜず、所謂不生不滅、不垢不淨、不增不減。――暗昏々、』サツパリわからぬ。眞暗で一寸先も見えぬ。――厨庫三門、』厨庫は禪寺の庫裡、炊事場のこと。三門は寺の門のこと。何故に三門と云ふ、其の意味は既に申しましたから今は略す。――好事不如無、』閑事も心頭にかゝれば錯、況んや好事に於てをや。ないがマシだ。氣が樂だ。蓋し佛見法見の好事も無爲の閑道人には邪魔もの邪魔もの。――

提講。

一句に三句を具す、と云ふ例の言句に妙を得た雲門禪師が、人々盡く光明のあるあり、看る時見えず暗昏々、と垂語された。サァ其の人々本具の光明とは如何なるものか。風外老人は、「光明にも色々ある。明るい光明も眞黑な光明も、長い光明も短い光明も、四角な光明も丸い光明もある。」と云はれた。無論、然りである。日月の光明の如く明るい光明のみを光明と思ふは愚の極。こゝの光明は張拙秀才の云はれた光明寂照遍河沙の光明で、人々本具の光明である。井上君は此の光明を宇宙の大能者の光明と見て、「われ〳〵人間と云ふものは宇宙の光明に攝取されてをるのである。世の中の人々は、朝には太陽は上るもの、晩には太陽は沈むもの、月は美しいもの、花は見事なもの、砂糖は甘いもの、芥子は辛いもの、と知つてをるだけで、これが皆人間に與へられた神の恩惠、神の光明であると云ふことを悟つて居ない。併し此の恩惠、光明は實に廣大無邊なもので、人間が看ようとしても中々見えない。故に暗くして昏々たりである。」と、自己の光明でなく自己以外に光明を認めて居らるゝ。世道人心には此の上もなきよき教訓である。されど雲門禪師の意は果して井上君の云はれし處にありや否やは疑問。衲は井上君に同意せず。或は雲門禪師の意にも背くか。それはそれとし

て、光明は自己のものなり、自己以外に光明なし、として以下話を續けます。何人でも一切の事々物々に對し、其の時に臨み其の場に應じ、千變萬化、千差萬別、滯りなく、なしたり、したり、して居る。それが光明である。開口して議論せずとも、擧心して擬議せずとも、平常底の茶飯である。――とは云ふものゝ、斯くなし斯くして居る、其の光明の本體は如何なるものなりや、と窮盡し來れば見る能はず、事實、暗昏々である。――茲に於て雲門禪師云く、作麽生か是れ諸人の光明、と。サァ云うて見よ。敢へて云ふ人なし。――雲門禪師は此の垂語を以て二十年間、門下參學の徒を勘檢なされたが、一人とし

て禪師の機に契ふものがない。或日、香林の遠禪師、雲門禪師に向つて、「どうぞ吾々に代つて一語を示したまへ。」と願うた。仍て雲門禪師、自ら代つて云く、「厨庫三門。」――厨庫はあそこに、三門はこゝに。見えたか、知れたか。見えたら見えたでよし、知れたら知れたでよし。』それは何ものが見る、それは何ものが知る。――斯く云はるゝと、直に心で擬議し口を開かんとする。それを見て、「好事もなきに如かず。」と迹を拂ひ跡を滅せられた。――衲が臭口を開いて駄辯を弄する、是れも畢竟なきに如かず。寧ろ始めより一言も吐かぬ方がましである。然るに斯く云ふは兒をあはれんで醜を忘るゝ底。――

◎頌

自照列孤明、爲君通一線、花謝樹無影、看時誰不見、見不見、倒騎牛兮入佛殿、』

讀方

自照にして孤明を列す。君が爲に一線を通ずるも、花は謝して樹に影なし。看る時、誰か見ざらん。見れども見えず。倒に牛に騎つて佛殿に入りぬ。』

字解、分解。

自照列孤明、』是は光明の絶對的なることを云ふ。人々本具の光明は所謂晴れてよし曇りてよし、晴れても曇つても元の姿に變りはない。――列、』放ち發すの意。――花謝、』花が散つて色香がなくなつた意。――樹無影、』日が暮れて樹の影がなくなつた意。散つたのも光明、なくなつたのも光明。――光明そのまゝが暗昏々、暗昏々がそのまゝ光明。――看時誰不見、』明るい處も暗い處も看ようとすれば見える。――見不見、』本來自己の光明は明暗を超越してゐる故、見るまゝが不見である。見て見えず、と云ふことは透關底の眼でなければ眞箇の處は知れぬ。――倒騎牛、』悠々閑々の意。暗昏々に比したものなり。知るべし、厨庫三門は光明、倒騎牛は暗昏々。

提講。

眞箇の光明は外より來るものに非ず。人々本具、箇々圓成、自己自身が一大光明の本家本元である。其の一大光明は三世十方を常に恒に照破してをる。言句や文字で以て到底語り盡し書き盡すことは出來ぬ。されど事實、古往今來、自照孤明を列すで、蓋天蓋地、隱さんとして隱す能はず、捨てんとして捨つる能はず。」雲門禪師は强ひて一線を通じ、諸君の爲に厨庫三門と指示され、雪竇禪師は、花謝して樹に影なし、と雲門禪師に唱和された。要は、明白々のときは明白々に徹底し、暗昏々のときは暗昏々に徹底するにあり。見るも自己の自由、見ざるも自己の勝手。畢竟、見るが見るに非ず、見ざるが見ざるに非ず。本具の一大光明は由來、光明を超越したるもの。故に見不見のそのまゝが、或時は厨庫三門となり、或時は花謝樹無影となる。

——雪竇禪師は、雲門禪師の好事不如無を、倒騎牛兮入佛殿と結ばれた。雲門禪師は好事の句で一切を掃蕩された。雪竇禪師は倒騎の句で一切を建立された。——建立するも好し、掃蕩するも惡しからず。圓悟禪師、下言して半夜日頭出、日午打三更と。夜半かと思へば太陽が顏を出し、眞晝中かと思へば夜半の鐘がなる。所謂、明中に暗あり、暗中に明あり。明とも云ひきれず、暗とも云ひきれぬ。强ひて是を明暗雙々底と云

ふ。――眞箇の處を知らんと要せば、例の坐禪だ坐禪だ。自己自身に向つて研究すべし。それより外に道はない。――

（昭和十五年六月二十二日講演）

第八十七則　雲門藥病相治

◎垂示

垂示云、明眼漢沒窠臼、有時孤峰頂上草漫々、有時鬧市裏頭赤灑々、忽若忿怒那吒、現三頭六臂、忽若日面月面、放普攝慈光、於一塵現一切身、爲隨類人、和泥合水、忽若撥著向上竅、佛眼也覷不著、設使千聖出頭來也、須倒退三千里、還有同得同證者麼、試擧看、』

讀方

垂示に云く、明眼の漢は窠臼を沒す。有時は孤峰頂上に草漫

々、有時は開市裏頭に赤灑々。忽ち若し忿怒せば、那吒の如く三頭六臂を現ぜん。忽ち若し日面月面ならば普攝の慈光を放ち、一塵に於て一切身を現じ、隨類の人と爲つて和泥合水せん。忽ち若し向上の竅を撥着せば、佛眼も也た覷不著ならん。設使千聖出頭し來るも、也た須く倒退三千里なるべし。還た同得同證の者有りや。試みに擧す看よ。』

字解、分解。

『沒窠臼』窠臼は根據地、尻のおき場、又は執着。』普通一般は、學問があれば其の學問を自己の窠臼となし、識見があれば其の識見を自己の窠臼となし、財産があれば其の財産を自己の窠臼となす。然るに破衲子、正師家は一切事々物々に執着せず、隨處隨時、自由自在に運轉する。――有時、』あるとき、不定の言葉。――孤峰、』高き山と見ればよろしい。向上又は第一義。――草漫々、』一面に草が繁茂してをる。深遠なる樣を斯く表したるもの。――開市裏、』四通八達の處。東京の銀座か西京の京極。――赤灑々、』氣どらず、寸糸かけず、本分の風光まるだし。――忽若、』若し忽ち、でも差支へなし。――那吒、』毘沙門のことであると云ふ説もある。那吒鐵面皮と云ふことがある。今日世間で顔の皮の厚き人を指して、彼は鐵面皮だと云ふ。蓋し是より出でしならん。要するに忿怒の相を云

うたのである。――日面月面、』慈愛の相を示したものなり。――普攝、』接取不捨と云ふ句がある、それと同意。一切を包容する義。――一塵、』塵即自己と見るべし。何が故にと云へば、其の物、それに自己がなりきるからである。――隨類人、』隨機應根、一處に止らず、所謂觀世音の三十三種の活動である。――和泥合水、』下化衆生の當體。六道の四生と、組んず、ころんず、する底。――向上竅、』向上、千聖不得。――撥着、』開く意。發揮又は拈出、擧揚。――覷不著、』見ることできぬ、不可能のこと。――同得同證、』以上の境界を眞箇に掌握し其の窠臼におちず而も能く接化利生する者を云ふ。

提講。

圜悟禪師の本則を左におき、座下の修行者に對し例の大獅子吼。苟も明眼の漢であるならば、既に大死一番、再活現前。故に生死は元より三界を出離したる有力の大人。窠臼なぞと云ふ根據地があつてたまるものか。常に恒に今時に着せず、那邊に依らず、把住放行自由自在。其の靈活妙境の一端を語らば左の如し。

ある時は、孤峰頂上、佛祖も窺ふ能はざる第一義に居して草漫々、――ある時は、鬧市裏頭、魔外も知り得ざる垂手に出で赤灑々。――時あり忿怒するや三面六臂の那吒太子そつち

のけ。――時あり微笑するや日面月面の慈悲顔そのまゝ。――其の轉變、其の出沒、一微塵に於て觀世音の如く三十三身を化現し、六道四生の隊中に入り和泥合水、樂しむや共に樂しみ、苦しむや共に苦しみ、起臥も共にし飲食も共にし、而して君子は和して同ぜず、眞金、火に入つて色轉ゝあざやかなりで、決して小人の如く同して和せざるものにあらず。所謂、地獄に入りては地獄の主、餓鬼に入りては餓鬼の主、箇々轉處に立在。卑近に云へば上は王侯大臣より下は藝娼妓に至るまで、すべての階級に對し平等に交際し、その人その人に多少なりとも安心を得せしむ。』以上を一括して云へば、上求菩提、下化衆生。――されど一朝、向上竅(自己本分底)を撥着すれば、虛空消損鐵山碎、把住も放行も、攝取も折伏も、今時も那邊も、清風、明月を拂ひ、明月、清風を拂ふで、一切の消息、其の跟跡を絶す。故に三世の諸佛と雖も窺ふに門なし。百萬の魔外と雖も寄りつくに處なし。』是を向上の一路、千聖不傳と云ふ。サァ座下の諸士、恁麽の活眼を所持して居るか。――幸に恁麽の活眼を所持して居るならば、恁麽の活眼者と同得同證することが出來る。――心ある者は去つて本則に參じ來れ。

◎本則

擧、雲門示衆云、藥病相治、盡大地是藥、那箇是自己、

舉す。雲門、示衆して云く、「藥病相治。盡大地是れ藥。那箇か是れ自己なるぞ。」

字解、分解。

藥病、』藥と病氣。――相治、』双方相互に融和すること。

――盡大地是藥、』文殊と善財の問答に、盡大地是藥ならざるなし、とある。事實、盡大地是藥である。更に一方から見れば盡大地是毒とも云へる。要は用ある人の使用如何にあり、其のもの、それ自體になし。――那箇是自己、』盡大地是藥とすれば、自己はどこにある。藥の外が自己か、自己の外が藥か。

提講。

本則の本領は自己ならざる自己になること。』自己ならざる自己とは、言を換へて云へば小我を捨てゝ大我になること。』婆言を弄すれば、小我は一種の病氣。此の病氣を迷の煩惱と云ふ。迷の煩惱病には悟の大悟藥が入用。藥病相治で、藥の方から云へば病が恩人、病の方から云へば藥が恩人。藥は病を治し、病は藥を治す。病にあらざれば藥の効あらはれず、藥にあらざれば病も治らず。』知るべし、八萬四千の大悟藥は八萬四千の煩惱病を治す。八萬四千の煩惱病は八萬四千の大悟藥を治す。大悟藥にあらざれば煩惱病は治らず、煩惱病にあらざれば大悟藥

の効あらはれず。――――　果して然らば病と藥、迷と悟、藥病雙々、迷悟雙々、同價値、同位置。――――

以上は一應の道理。道理は道理として、病あれば藥を服せざるべからず、迷あれば悟らざるべからず。病んで藥を服せざれば更に其の病を增し、迷うて悟らざれば更に其の迷を長ず。病を病と知りつゝ服藥せざる人、迷を迷と知りつゝ悟らざる人、古往今來極めて多。嗚呼、可愍かな。――――

世の中には(肉體上)如何なる病にかゝつても誓つて藥を服せざる人がある。さうかと思ふと、一寸した風邪にもそれ藥それ藥と騷ぐ人がある。實を云へば何れも不是。――――又(精神上)自己を忘れ、一から十迄それ阿彌、――――それ日蓮、――――それ不動と云うて他の力に依賴する人がある。さうかと思ふと、三界唯心、萬法唯識を揮りかざし、自己是れ佛、自己是れ神、と自尊主義に傾く人もある。』要するに是れ又何れも不可。――――

是れらの病を救はんが爲に、雲門禪師は平地に波瀾を起し、盡大地是藥、と喝破なされた。其の意味は、藥の時は盡大地悉く藥となれ、病の時は盡大地總て病となれ、眞箇其の時其の時そのものになり得れば、肉體上の病は無論のこと、精神上の病も併せて平癒する。那箇是自己。』自己と云ふものが、藥の外、病の外、妄想の外、悟りの外にあるか、決してなし。果して然ら

ば自己なきか、――盡大地是自己。――藥病の二見、迷悟の相對、それを離れ、それを絶し、病來らば病に應じ、藥來らば藥に應じて從容自適。――妄想が起らば妄想に隨ひ、悟が現ずれば悟に背かず、任運自在。――之是を盡大地是自己と云ふ。所謂自己ならざる自己である。此の本則に對し古人の意見は一樣ならず。今は一切略す。』

◎頌

盡大地是藥、古今何太錯、閉門不造車、通途自寥廓、錯、錯、鼻孔遼天亦穿却。』

讀方

盡大地は是れ藥なり。古今何としてか、太だ錯るや。門を閉ぢて車を造らざれ。通途は自ら寥廓なり。錯れり、錯れり。鼻孔は遼天なるも亦穿却せられん。』

字解、分解。

閉門不造車、』古語に、閉門造車、出門合轍、とある、それに基いて吟じたのである。此の古語の意は、別に法則を嚴守せずして爲すことが知らず〳〵の間に自然の法則に一致して居ると云ふこと。』雪竇禪師の此の句を使用なされた心底は、あれが迷ひ、これが悟り、あれが藥、これが病、なぞと云うて種々樣々に妄想を繰返して居ることを閉門造車に比し、そのやう

なことは一切無用であると云ふ意味から、閉門不造車と、中間に不の字を添へられたのである。――寥廓、』廓然無聖の廓然と同意。大道は由來、無障無礙。曲解邪解は無駄。――錯、錯、』やり損つた、しそこなつた、云ひ損つた。――大間違。――鼻孔遼天、』鼻が高いぞ、お山の大將、われ獨り。――亦穿却、』鼻をあかされる、鼻を打ち折られる、やりこめられる意。――

提講。

盡大地是藥、』是れは雪竇禪師の慣用手段。公案の要點を第一に拈提して、順次に意見を述べられた。可謂、用意周到と。

――雲門禪師、何を喚んで盡大地と云ふ。何を指して藥と云ふ。元來、盡大地とすべきものがどこにある。藥とすべきものがどこにある。然るに强ひて盡大地だの藥だのと閑言語を弄するから、一盲衆盲で、古今何太錯。それからそれと錯を以て錯につくものが多い。(今日も亦然り。)人を迷はす火元は雲門禪師だ。雲門禪師の示衆が禍の種だ。――昔はものを思はざりけり、かゝる示衆のために諸人が脫體現成、赤裸々底を棒にふつてしまふ、――と雪竇禪師は雲門禪師を咎められた。』由來、我が這裏、從容自適、任運自在、處々眞處々眞、一も不是なることなし。一定の法規を守り門を閉ぢて車を造る必用なし。

坐臥、進退、語默、喜怒、總に是れ祖師西來意。』――之是を通途寥廓と云ふ。聞かずや、至道は無難なることを。――それに何事ぞ、殊更に那箇是自己とは。錯、錯。半ば雲門禪師にあたり、半ば雪竇にあたる。千聖不傳の那一句から云へば、雲門の示衆も錯、雪竇の頌も錯。（衲が古則公案につき四の五の云ふのも錯。）故に結句に鼻孔遼天亦穿却せらるゝとある。鼻孔遼天は雲門禪師のことか、雪竇禪師のことか。雪竇禪師も鼻孔遼天、――雲門禪師も鼻孔遼天。――鼻孔遼天必ずしも惡しからず。人々お互も鼻孔遼天になるべし、ならざるべからず。――釋迦何人ぞ、われ何人ぞ。――雲門何人ぞ、われ何人ぞ。――雪竇何人ぞ、われ何人ぞ。することある者は皆斯くの如し、――錯。錯。鼻孔遼天亦穿却、――衲は敢へて辭せず。』

（昭和十五年七月六日講演）

第八十八則　玄沙三種病人

◎垂　示

垂示云、門庭施設、且恁麼破二作三、入理深談、也須是七穿八穴、當機敲點、擊碎金鎖玄開、據令而行、直得掃蹤滅跡、且道、諸訛在什麼處、具頂門眼者、請試擧看、

讀　方

垂示に云く、門庭の施設には且に恁麼に二を破り三を作すべし。入理の深談には、也た須く七穿八穴なるべし。機に當つて敲點するには金鎖玄關を擊碎すべし。令に據つて行ずるには直ちに掃蹤滅跡なるを得べし。且く道へ、諸訛は什麼の處に在りや。頂門の眼を具する者は、請ふ試みに擧す看よ。

字解、分解。

門庭施設、第二義門に下り、應機接物、下化衆生底。

破二作三、例せば、一箇のものを二つに分ち二人を喜ばし、二箇のものを三つに分ち三人を樂しましむ。是れに限らず手段方便を以て慈悲落草すること。

入理深談、第一義門、向上の一路、佛祖の堂奥。

七穿八穴、自由自在、煮ようと思はば煮るべし、燒かうと思はば燒くべし。微に入り細に入り、無示無說にして學者を接引

することを云ふ。』

敲點』敲は問ふこと。點は答へること。學者の問ひに應じて答へる義。――金鎖玄關』金鎖は堅牢の意。玄關は至難の心。佛病祖病、法病禪病、それ等を云ふ。――據令而行』令は法令のこと。規則通り、法規通り。私に車馬を通じ、官に針を入れざる當體。――掃蹤滅跡』佛魔をして窺ふに門なく、知るに道なからしむるを云ふ。――請訛』緊要の處、――又はハツキリしない處。或は面白くなき處、やり損つた處。種々異說がある。今は緊要の處をとる。――

提講。

師家が學人を接得する上にも、家主が一家を經營する上にも、二を破りて三となし、七穿八穴するは是非とも必要である。如何に佛祖向上の第一義諦を手に入れても、臨機應變の手段を以て接化利生することが出來ねば、手に入れた第一義諦が泣く。』――如何に學理に通じ議論に勝れても、家事萬端が圓滑に行かなければ、學理も議論も半文錢の價なし。』――極言すれば、門庭施設の外に入理深談なし。入理深談の外に門庭施設なし。入理深談が即門庭施設、門庭施設が即入理深談。――自携瓶去沽村酒、却著衫來作主人。――師家となりては師家の本分を盡して學者を接得すべし。家主となりては家主の本領を

傾けて生計を圓滿にすべし。それには二を破りて三となすも好し、又は一を以て十となすも敢へて惡しからず。――紅葉を以て黄金となすも不思議はない。丈六の金人を以て一莖草となすも不道理ではない。――要は當機敲點にあり。問ひに應じて答へ、求めに應じて與ふ。其の人の根機と其の時の場合を見、鐘は打つの大小に應じ水は汲むの深淺に答ふるが如く、聊かも我意我見を入れず向上に出て來れば向上、向下に出て來れば向下、或は逆に向下に出て來れば向上に、向上に出て來れば向下に、横拈倒用、無礙自在に、然らざれば金鎖玄關を擊碎することが出來ぬ。（金鎖とは煩惱妄想病のこと。玄關とは佛病祖病禪病のこと。）金鎖玄關を擊碎しても、擊碎した其のあとが殘つては所謂靈龜尾をひくで、正師家のなすべき處に非ず。直ちに蹤を掃ひ跡を滅せざるべからず。如何に蹤を掃ひ跡を滅すべきか、それは人々自己に返照して知るべし。然らざれば露柱燈籠に問ふべし。――

以上の如く眞俗二諦に於て、自由自在、無礙圓融に活轉することの出來ぬは、何處にか不明の處があり、不穩の處があり、不徹底の處があるに相違ない。サァ門下の諸士、我こそ頂門に眼を具せりと思ふ漢は進んで本則に參ずべし。試みに擧揚するから看よ。そら是れだ。――

◎本則

舉、玄沙示衆云、諸方老宿、盡道接物利生、忽遇三種病人來、作麼生接、患盲者拈鎚竪拂、他又不見、患聾者語言三昧、他又不聞、患啞者敎伊說、又說不得、且作麼生接、若接此人不得、佛法無靈驗、』僧請益雲門、雲門云、汝禮拜著、僧禮拜起、雲門以拄杖拄、僧退後、門云、汝不是患盲、復喚近前來、僧近前、門云、汝不是患聾、門乃云、還會麼、僧云不會、門云、汝不是患啞、僧於此有省、』

讀方

舉す。玄沙示衆して云く、「諸方の老宿、盡く道ふ、接物利生と。忽ち三種病の人の來るに遇はば、作麽生か接せん。患盲の者は拈鎚竪拂するも、他又見ざらん。患聾の者は語言三昧なるも他又聞かざらん。患啞の者は伊をして說かしめんとするも、又說くこと得ざらん。且に作麽生か接せん。若し此の人を接すること得ずんば、佛法には靈驗なからん。」僧、雲門に請益す。門云く、「汝禮拜着。」僧禮拜して起つ。雲門拄杖を以て拄く。僧、退後す。門云く、「汝は是れ患盲にあらず。」復、「近前來」と喚ぶ。僧、近前す。門云く、「汝はこれ患聾にあらずや。」門乃ち云く、「還た會せりや。」僧云く、「不會。」門云く、「汝は是れ患啞にあらず。」僧、此に於て省有り。』

字解、分解。

諸方老宿、』老宿は大宗師家のこと。あちらの老大師、こちらの老和尚、と云ふべきを諸方の老宿と云うたのである。——

接物利生、』物も生も共に人を指す言葉。接物利生は學者の養育、衆生の濟度。——三種病人、』三は盲聾啞の三。一人にあらず、盲人、聾人、啞人の三人のこと、——と云ふ人もある。

が今に一人にて三種の病ある人。——拈鎚竪拂、』拈は拈華、拈出、拈起。——鎚は禪家に於て常に使用する鳴物の道具を打つこと。——竪はたてること。拂は拂子、蚊拂の如き品。』何れも思想を表現する道具。事實を知らんと欲せば、禪家に行き親しく見聞すべし。——語言三昧、』三昧は一心不亂。語言三昧は眞面目に餘念なく話したり語つたりする底。——有省、』聊か自覺した、目がさめた。——

提講。

玄沙は福州の師備禪師のこと。』此の人、晩年僧と云うて三十歳の時に出家された。それまでは純然たる在俗の人。それが一朝發心して格外の大宗師家となられた。お互も奮心努力次第で佛祖以上にもなれる。豈猛省せざるべけんや。』——玄沙禪師が座下の修行僧に向つてのお說法。此の頃の老宿方は新體制に共鳴して東の方でも西の方でも互に相爭うて、それ布敎、それ

傳道、それ坐禪、それ何それ何、と無暗に接物利生にうき身をやつして居らるゝ。それを決して無駄だ無益だとは云はぬ。——が、斯く熱心に下化衆生してをらるゝ其の人のお手元は實際たしかであらうか。人を敎化せんと欲せば先づ以て自己を敎化しなければならぬ。自己を敎化せずして人を敎化するは順序がちがふ。果して自己敎化が出來てをるか否を試驗するために一つ問題を出すことにしよう。

こゝに盲、聾、啞の三種病を獨りで背負うた人がやつて來たら、如何に此の人を敎化するか。盲人であるから、拈鎚、竪拂して見せた處で聊かも感じない。』聾者であるから、如何に雄辯を揮うて說法しても馬耳東風。』啞病であるから、あの手この手を以て方便しても口のきけるものでない。』サァ此人に當面したら、三界の大導師、娑婆世界の生佛を自稱自任して御座る現在の老宿方、如何に接物利生なさる。——普通一般の人なら、如何に横車を引かうが、如何に理窟をこねようが、如何にわからず屋でも、眼も耳も口も尋常であるなら、手段と方便の活用次第で敎化の出來ぬことはない。此の三種病者、癈物同樣の厄介者を敎化することが出來なければ、大宗師家たる面目が立たぬのみか、佛法そのものに靈驗なしと云ふことになる。サァどう敎化したものか。——衲が如きは大宗師家でないから、無

論出來る筈はないが、有力の大宗師家であれば朝食前のお茶であらう。――此の示衆を傳へ聞いたか、或は直接に聞いたか、其の點は知れぬが、或一人の僧が右の問題を擔うて雲門禪師に請益した。すると流石、雲門禪師だ。何の造作もなく、問僧に向つて、「君、禮拜しなさい。」僧、云はるゝまゝに禮拜して直立す。門、拄杖を以て此の僧をつくと、僧は退後、あとにさがつた。門云く、「君は盲者でないな。」――「君、拙僧の方に近前來、ちかよりなさい。」僧、ヅカ〳〵と前に出た。門云く、「君は聾者でないな。」――門、言葉を改めて云く、「還會麽。拙僧のなした事がわかつたか。」僧云く、「不會。少しもわかりません。」――門云く、「君は啞者にあらず。」處が不思議、不思議。問僧こゝに於て省あり。成程と承知をした。――可謂、雲門禪師は眞箇の大宗師家と。苟も大宗師家を以て自任する人は斯くなければならぬ。雲門禪師こそ眞俗二諦を横拈倒用、自由自在に活轉なされた老宿である。言ふこと勿れ、それは三種病者に非ず普通一般の人を接化したのである、と。咄、此の近眼者。眼に盲せざるも心に盲するものあり、耳に聾せざるも心に聾するものあり、口に啞せざるも心に啞するものあり。――由來佛法は心の三種病を醫するのである。――敢へて多言を要せず。本則はこれで講了。

◎頌

盲聾瘖啞、杳絶機宜、天上天下、堪笑堪悲、離婁不辨正色、師曠豈識玄絲、爭如獨坐虛窓下、葉落花開自有時、復云、還會也無、無孔鐵鎚、』

讀方

盲聾瘖啞、杳として機宜を絶す。天上天下、笑ふに堪へたり、悲しむに堪へたり。離婁は正色を辨ぜず、師曠、豈玄絲を識らんや。爭でか如かん、虛窓の下に獨坐せんには。葉の落つるにも花の開くにも自ら時有るものを。』復云く、「還た會せりや無。」無孔の鐵鎚。」

字解、分解。

瘖、」あん、と讀む。啞と同意味。――杳絶機宜、』杳はハルカの意。思慮も分別も及ばぬこと。如何ともなす能はざるを云ふ。――天上天下、』廣く世界を指して、盲聾啞がソコにもコ、にもゴロ〳〵してをる。――離婁、師曠、』此の二人につき多少の異說があるが、今は孟子離婁章句上に依ります。曰、離婁之明、公輸子之巧、不以規矩、不能成方圓、』師曠之聰、不以六律、不能正五音、』堯舜之道、不以仁政、不能平治天下。』註に離婁、古之明目者、師曠、晉之樂師知音者也。』離婁、百步外、能見秋毫之末、――師曠、隔山聞蟻鬪、とあります。』

以上の二人は耳と云ひ目と云ひ、天下無類の聰明者である。されど離婁は本地の風光を見ることが出來ぬ。何故かと云へば、明者にして眞盲者にあらざるがために。――師曠は眞如法性の妙音を聞くことが出來ぬ。それは眞聾の人でないからである、と頌じられた。――正色、』眞空妙有の色。――玄絲、』聲前微妙の聲。――獨坐窓下、』見聞覺知は心頭を勞せず、自適從容の境界。――落葉開花、』本地の風光、――本來の面目、天地自然のありさま。――無孔鐵鎚、』是れが雪竇禪師の眞盲、眞聾、眞啞である。――

提講。

世の中は眼あき千人、眼くら千人と云ふが、實際は眼くら許り、眼くらも〳〵耳も口も共に不自由な入念の眼くらが群をなし隊をなしてをる。實に世話のやけること此の上なし。――此の有樣を雪竇禪師が、盲聾瘖啞、杳絶機宜、天上天下、堪笑堪悲、と吟じられた。サァ茲にをらるゝ諸君は眼あきか、眼くらか。――眼くらの人は獨りもなからう。何れも眼あきで、耳も聞える、口も話せるでありませう。若し眼くらで其の上、耳も聞えず口も話せなかつたら諸君はどうなさる。――それは大いにこまる、と云はるゝであらう。――諸君、知るや知らずや、此の世に立つて越格拔群の人とならんと思はば、是非

とも眞の盲者、眞の聾者、眞の啞者にならなければ所志を全うすることは出來ません。斯く申すと、諸君は不思議に感ぜらるゝかも知れぬが、事實であるから致し方がない。――左に其の所以を語りませう。如何に諸君が聰明であり、如何に諸君が頴敏であり、如何に諸君が英才であつても、實相無相の面目が眼に見えますか。法性眞如の聲が耳に聞えますか、涅槃妙心の樣子が口で語れますか。是を語り是を聞き是を見んと思はば、大死一番、父母より頂戴したる眼も耳も口も敲きつぶし、踏みにじり、寸毫も其の形影を止めざる眞盲、眞聾、眞啞にならざるべからず。

果して眞盲、眞聾、眞啞になりし曉は、見るもの悉く實相無相、聞くもの悉く法性眞如、語るもの悉く涅槃妙心。茲に到達せし人を君子とも大人とも、英雄とも豪傑とも、神とも佛とも云ふ。――諸君、既に知つてをらるゝであらう。離婁と云ふ人、師曠と云ふ人、是れ等の二人は、其の眼、其の耳に於ては世界無類の明目者であり聰耳者である。されど大死一番、再活現前せざるがために、普通一般の形は能く見透し、尋常一樣の聲は能く聞き透す。如何せん眞盲、眞聾、眞啞の妙境に達せず。故に無形の形、無聲の聲を見ることも聞くことも又語ることも出來ぬ。――閑言語は是れ位にして、眞盲、眞聾、眞啞の妙

境底を聊か漏らして見ませう。――雪竇禪師は、爭如獨坐虛窓下、葉落花開自有時、と獅子吼なされたが、必ずしも虛窓の下に獨坐し無事太平の人となり、千林の紅葉、百花の爛漫を相手にしなければならぬと限つてはをらん。紅塵萬丈の中でも、千客萬來の時でも、四百四病一時に到來の際でも、敢へて差支へはない。要は、其のもの、それになりきるにあり。――果して、其のもの、それになりきる事が出來れば、それがそのまゝ眞盲、眞聾、眞啞の妙境露堂々である。――斯く云はば、何だそれ位のことなら昔の昔に百も承知、と云ふであらう。故に雪竇禪師、重說偈言して、還會也無、――と駄目をおされた。云ふ勿れ、落草の談と。是れが雪竇禪師の慈悲深重の處。棒喝を下すのみが師家の本分ではない。會する會せざるにかゝはらず、無孔鐵鎚、と眞盲、眞聾、眞啞の理盡き詞究まる底を一箇無孔の鐵鎚として諸君の面前に擲げ出された。サァどうだ。――眞箇無孔の鐵鎚だ。――了。

（昭和十五年七月二十日講）

414
254

昭和十六年一月二十七日印刷
昭和十六年二月　三　日發行

著作兼發行兼印刷者　佐々木四郎
東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井總元方內

發行所　東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井總元方企畫部

終